

ショートショート

マキの勝算 光夫の誤算 渡辺鴨禾

マキは、長年水商売をしていたためか、不眠症になっていた。眠たくなるのは、朝五時頃からだ。起きるのは、十一時頃。喫茶店のモーニングにも間に合わず、簡単な朝食を済ませ、昼頃に掃除や買い物をして、夕方の四時ごろに毎日風呂に入るのが、マキの日課だ。

五時に家を出て、Rクラブに入る。彼女は、ホステスが自分の天職だと思っている。彼女の聞き上手、話し上手に、客たちは喜びお酒を飲むが、マキはお酒が飲めないので、飲むふりをして、ボーイに助けってもらったりしていた。

客で毎晩、通ってくるようになった土木業の社長である光夫が、マキを気に入り、後妻に迎え入れた。子供もおらず、一年前に妻に先立たれてしまい、やる気も起こらず、ふらりと入ったRクラブで、マキを見出した。

〈この女なら、再び男としての活力が漲るのではないか〉と。

マキはマキで、三十五歳になっても、貯金もできず、店も持てずで、よいチャンスだと思った。

それぞれの思惑により結婚したが、光夫は不満を抱くようになった。マキが普通の主婦になっていくにつれて、家に帰るのが億劫になっていき、マキと結婚しても活力が湧かず、逆に疲労が感じられるようになった。

〈こんなはずではなかった〉と、光夫は後悔するようになった。

友人に愚痴を言うと、

「愚痴めいて自慢しているのやな。嫁はんは節約家で、弁当まで作ってくれて、服も自分で作るやと！ 今度こそ、大当たりやないか」

友人は、ビールを一気に飲み干して続けた。

「俺の女房なんて、デパートに毎日出かけてショッピングにカードで支払うから、カード会社からの請求書に毎回ひやひやしているけど、俺の稼ぎでいつも一回払いできているから、女房からすれば大当たりの夫やが、俺からすればハズレやで」

友人からも身勝手な奴と思われてしまった。もはや誰にも愚痴は言えないと思い知った光夫。

「良い妻ぶりが嫌になった」と言う光夫が、世間から身勝手な夫と評されるようになった。

〈俺は良妻を求めて結婚したのではない。刺激と、活力と、男としての自信を取り戻したかっただけなのに、自身は萎えるばかり。俺の悩みは誰も理解できないだろう。再婚など

しなければよかったのだ。離婚すれば資産が減るのも惜しい。このまま生活を続けよう。離婚したがっていることなど感付かれないように、気をつけよう

光夫は独りで思い悩み、諦めて、いつもの日常を送るうちに、先妻のことも少しずつ忘れていくようになった。

マキはお金を貯める楽しさを覚え、通帳マニアになっていた。通帳名義はマキの名前が書かれている。

独身時代、お金を貯めようとも思わなかったのに、結婚してから貯金することに目覚めたのだ。自分の良妻ぶりを自慢したいくらいだ。

「私って、主婦が天職かも！」と思うこの頃だ。

不眠症だったのに、結婚してから眠れるようになったのには驚いた。こんなことなら、もっと早く若い頃に結婚すれば、子供も産めたのだろうか、もう子供を産むチャンスもない。

昼頃、喫茶店でスイーツを食べ、コーヒーを飲むマキの体重は日毎に増えていき、お水時代の仲間からでさえ、マキと気付く人もいなくなり、(そんなに私は様変わりしてしまっただのか)と思った。くびれていたウエストが寸胴のようになり、服だつて3Lサイズになり、店で売られていないサイズなので、自分で服を作るようになっていた。型紙なしで、ダメもとで簡単なワンピースを作って、ご近所のお茶会に着て出たら、

「私も作って！」

と注文が入り、この頃ミシンの前にいることが多くなっている。

洋裁が趣味だったので、人に注文されるのは嬉しいものだ。

それにしても暑い。八月だからなのか、気温が三十八度。異常すぎる。クーラーも付けたままで、電気代が気にかかる。

結婚してから、私は変わった。夫は十月に還暦を迎えるので、どのようなパーティーが楽しそうか考察中だ。六十人規模のパーティーが良いかもしれない。

結婚って、なんと様々な未知なる可能性を引き出し、未知なる才能を育んでくれるのだろうか。結婚して良かった!!